

三つつの取り組みで 交雑種肥育牛の 枝肉重量確保に成功

枝肉相場が低迷している昨今、肥育農家の経営安定において、枝肉重量の確保は必要不可欠である。今回はある生産者協議会とくみあい飼料の連携により、枝肉重量の確保を実現した優良事例を紹介する。

枝肉重量確保の重要性

この生産者協議会は同じブランド牛を生産する交雑種肥育農家で構成されている。平成19年度の飼料価格高騰時に枝肉重量を増やす三つの取り組みを、くみあい飼料の提案のもと開始した。

① 価格抑制飼料を活用した新たな給与体系の確立

既存の配合飼料に代替する価格抑制飼料の現場試験を複数農家で実施し、給与体系を確立。具体的には価格抑制飼料の使用とともに、肥育前期、中期、後期におけるステージ

ごとの配合飼料と粗飼料の適切な給与バランス、前後期飼料の切替時期などをポイントに、既存給与体系からの改善を行った。

② 肥育前期のタンパク質増給

2008年日本飼養標準・肉用牛でも記されているとおり、肥育牛の大型化に伴いタンパク質の要求量は増大している(表1)。また育成期に種々の疾病に罹患し、タンパク質含有量の高い育成用飼料を必要量摂取できなかった牛は、肥育前期で回復を図るため別途タンパク質原料の補給を行うことが望まれる。この協議会では虚弱な素牛を中心に、肥育

前期に大豆粕を500g程度追加給与することを徹底し、肥育前期の骨格および筋肉の発達を促した。

③ ビタミンAコントロールの徹底

ビタミンAコントロールが適切に実施できているか確認するため、複数農家で採血を実施。その結果、脂肪交雑向上のためにビタミンAを低下させる必要がある肥育中期(15~20ヵ月齢)に血中ビタミンA濃度が30IU/dl前後と、ほぼ目標どおりに落とすことができていますと確認できた(図1)。一方で交雑種雌はビタミンAの落ちが去勢より緩やかなことが判明したため、雌の前後期飼料の切替を去勢より1ヵ月早めた。また去勢、雌とも一部の牛が20IU/dlを下回るほどの危険なコントロールになっっていることがわかった

ため、ビタミンA添加飼料を早め追加給与することを徹底した。

おいしい牛肉づくりをめざして

ほかにも、第一胃づくりのため肥育前期は粗飼料を優先して規定量食わせ込むこと、常に飼料給与量と残飼量の把握をすることなど、基本の再徹底を図った。その結果、枝肉重量は年々増加し、平成22年度上期平均(交雑種去勢)で519kgと平成20年度と比較し35kgも増加させることができた(図2)。同様に枝肉成績も3等級以上率が73%と12%も向上させることができた(図3)。

今後はおいしい牛肉を生産するため、脂肪質の改善などを図りながら、ブランド牛のさらなる販売促進を図ることが目標である。

DATA 事業規模

所在地: 関東地方

出荷頭数: 交雑種肥育牛

約500頭(年間)

枝肉重量確保の取り組み

表1：肉用種去勢牛の肥育に要する養分量2000年と2008年比較

体重	DG (1日増体重) (kg)		CP (粗タンパク質) (g)	TDN (可消化養分総量) (kg)	Ca (カルシウム) (g)	P (リン) (g)
300kg	1.00	2000(a)	841	5.2	33	17
		2008(b)	911	5.1	33	17
		b/a	108.3%	98.4%	100.0%	100.0%
350kg	1.00	2000(a)	865	5.6	33	19
		2008(b)	928	5.5	33	19
		b/a	107.3%	98.0%	100.0%	100.0%
400kg	1.00	2000(a)	883	6.1	32	20
		2008(b)	935	5.9	32	20
		b/a	105.9%	97.7%	100.0%	100.0%
450kg	1.00	2000(a)	898	6.4	32	21
		2008(b)	935	6.3	32	21
		b/a	104.1%	97.5%	100.0%	100.0%

Point!

CP (粗タンパク質) 要求量が2000年日本飼養標準・肉用牛と比較し、大きく増加している

Point!

雌は増体速度が遅いためビタミンAの消費量が少ないこと、ビタミンAが蓄積する脂肪が多いことから、血中ビタミンA濃度の落ちが去勢より緩やかになる

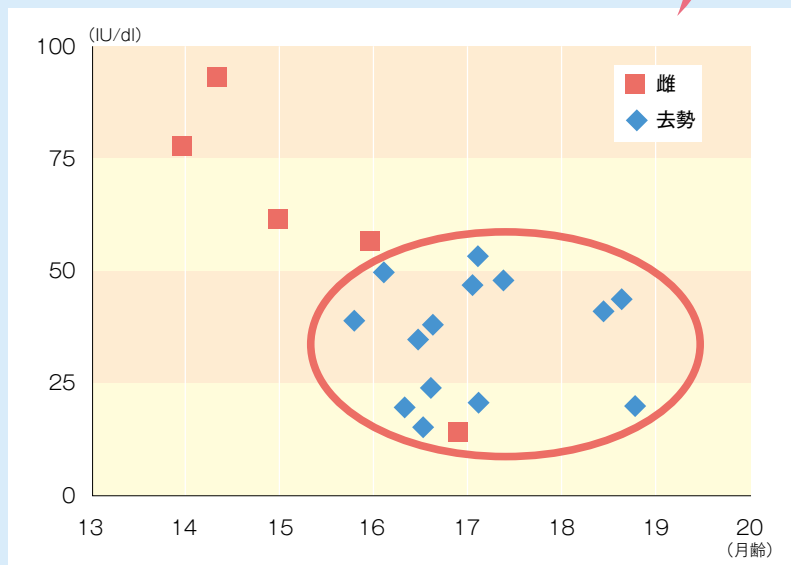


写真1：飼料給与量を正確に把握する



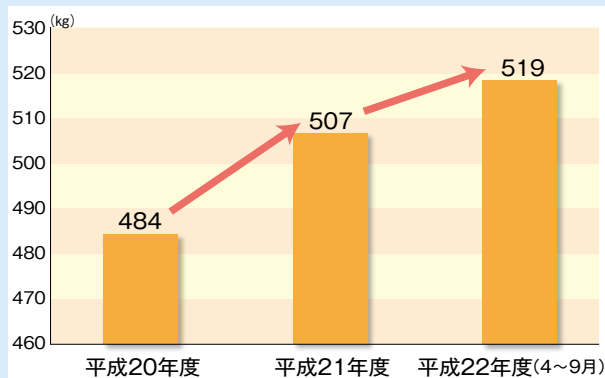
写真2：常時粗飼料を十分に給与する

図1：血中ビタミンA濃度



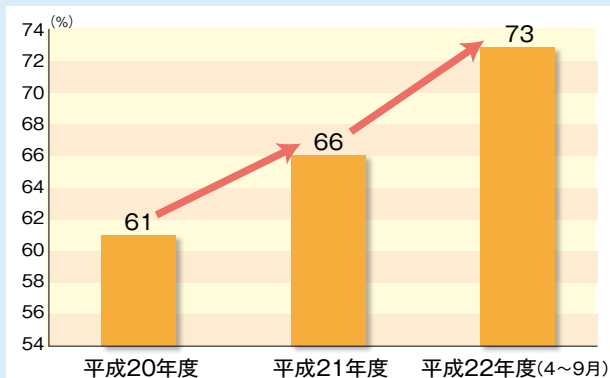
成績の向上

図2：枝肉重量の推移 (交雑種去勢)



※出荷頭数は平成20年度298頭、平成21年度294頭、平成22年度118頭

図3：3等級以上率の推移 (交雑種去勢)



※出荷月齢はどの年度も約27ヵ月齢で変わりなし